

保育者を目指す学生と子育て支援の専門家との協働
についての考察
:「子育てカフェ」における学生の実践的学びに注目
して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: YAMAMOTO, Issei メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4301

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



保育者を目指す学生と子育て支援の専門家との協働についての考察 —「子育てカフェ」における学生の実践的学びに注目して—

児童学部 児童学科 山本 一成 児童学部 児童学科 中山 美佐

要旨：本研究は、保育者を目指す学生と子育て支援の専門家の協働による子育て支援実践の意義について考察したものである。近年、大学が行う子育て支援の取り組みが広がりを見せているが、大学ならではの役割として、よりよい子育て支援のシステムやネットワークを構築しつつ、その実践が学生の学びに還元できるような仕組みづくりを行うことが必要である。本研究では、筆者らが2015年より、東大阪市の子育て支援の専門家と協働して実施している「子育てカフェ」の事例を通して、大学ならではの子育て支援実践について考察した。学生と子育て支援の専門家が協働で「子育てカフェ」を実施することで、学生は、(1) 大学では得られない現場のリアリティ、(2) 子育てに伴う負の側面についての理解、(3) 具体的な行為のレベルでの子どもへの対応の理解といった経験を得ていることが示唆された。「子育てカフェ」の事例の考察を通して、「地域連携」「学生の学び」「保護者への支援」を並立させる子育て支援実践の一端が提示された。

キーワード：保育者養成、子育て支援、地域連携、実践的学び

1. はじめに

近年、待機児童問題の解消をはじめとして、子育てをしやすい社会をつくるための体制づくりが必要とされている。そのような社会状況のなかで、大学に求められている役割も大きい。文部科学省は、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成を目指す「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に取り組んできたが、子育て支援という分野は、出産と育児をしやすい地域の環境をつくり、その地域で育った子どもたちが地元の産業を担い、再び次の世代の子どもを育てていくという持続可能な循環をつくるうえで欠かせないものとなっている。特に保育や教育に関わる人材を育成する大学は、地域の世代循環の核ともいえる子育て支援において、中核的な役割を担うことが期待されている。

このような背景のなかで、大学が主体となって行う子育て支援の取り組みが徐々に広がりを見せている。小原ら(2016)は、厚生労働省が作成している全国指定保育士養成施設一覧から565校を対象として質問紙を送付し、大学が取り組んでいる子育て支援の現状について調査している。その結果、回答した189校のうち、約7割がなんらかの子育て支援活動を行っていると答えており、多くの大学が実際に子育て支援実践を行う主体となっている。その支援形態の内訳は、主な

ところでは、キャンパス内での『ひろば型』(常設)が20.1%、キャンパス内での『教室型』が34.9%、キャンパス内での『鑑賞・発表型』が25.4%となっている。有償スタッフを伴う常設の子育て支援の取り組みは20%程度とまだまだ少ないものの、大学が学生を巻き込むかたちで支援のプログラムを開発し、地域の子育て支援の拠点としての役割を担おうとする動きが徐々に広がっていると言えるだろう。

大学が主体となって行われる子育て支援が定着しつつあるなかで、次の課題となってくるのが地域とどのような連携を行っていくのかという点である。これまで地域の子育て支援において中心的な役割を担ってきたのは、保育所や幼稚園、あるいは子育て支援センターや子育てひろばといった自治体の運営する施設である。これらの施設においてはすでに継続的な子育て支援の実践がなされており、具体的な技術や地域に応じた支援のノウハウも蓄積されている。地域全体の子育て支援の機能をより強化していくために、大学がこれらの施設のひとつとして加わり、支援実践を行うことももちろん必要であろう。しかし、地域の核となりうる物的・人的資源をもつ大学の特性を活かすには、地域の子育て支援ネットワークを拡大したり、あるいは子育て支援システム構築を促進したりといったようなより広範な役割が求められるのではないだろうか。ひとつ

の支援の場を点とすれば、それらを線として結んでいくような役割、あるいは、子育て支援の専門家を養成することで持続可能なシステムを構築していく役割などが必要とされているはずである。

また、大学が主体となって行う子育て支援の実践には、それを学生の学びにどのように還元していくのかという課題がある。地域の子育て支援のシステムに関与するとともに、その場で学んでいる学生が、将来自ら子育て支援のアクターとなった際に役立つ経験を得られるかどうかという点にも注意を払わねばならない。

本研究では、そのような問題意識に基づく地域連携の取り組みのひとつとして、自治体の子育て支援の専門家と学生の協働による「子育てカフェ」の実践について取り上げたい。筆者らは、2015年より、東大阪市子ども子育て室子育て支援課と連携し、「地域の子育て中の保護者が気軽に来場し、子育てについての話ができる場所」をコンセプトとした「子育てカフェ」の取り組みを行ってきた。2016年度には、「基礎演習」や「演習」といった授業の一環として「子育てカフェ」を実施し、「地域との協働」「学生の学び」「保護者への支援」を並立させる子育て支援実践を目指して改善を加えてきた。本取り組みはまだまだ発展途上であるものの、これまでの経緯と今後の展望について整理しておくことには意義があるだろう。そこで、本研究では、「子育てカフェ」の詳細について紹介し、学生へのアンケート調査の結果を踏まえつつ、大学ならではの子育て支援の在り方について今後の展望も含めて考察していきたい。

2. 「子育てカフェ」とは

(1) 2016年度に実施した「子育てカフェ」

2016年度は計3回の「子育てカフェ」を実施した(表1)。このうち、第1回目(7月10日)と第3回目(12月7日)の回は、東大阪市の子育て支援の専門家によるテーマトークの時間が設けられ、来場した保護者は、子どもと少し離れて子どもの発達やしつけについて来場者が話し合う時間をもつことができた。それぞれの回に「基礎演習」や「演習」を受講する学生が参加し、子どもの保育を担当したり、テーマトークの中に保護者とともに参加したりする役割を担った。

(2) 「子育てカフェ」の詳細

7月10日に行われた「子育てカフェ」には多くの親子の参加があった。主に未就園児の子どもとその家族であった。7月の暑い中、親子はどんな想いをもつ

表1 2016年度に実施した「子育てカフェ」の一覧

2016年度の「子育てカフェ」		
①7月10日(日)	10:30~15:30	会場：大阪樟蔭女子大学
②10月1日(土)	10:00~11:30	会場：大阪樟蔭女子大学
③12月7日(水)	10:00~11:30	会場：東大阪市立荒本子育て支援センター



写真1 子育てカフェのテーマトーク



写真2 子育てカフェでの学生の保育

て参加してくれたのだろう。何か得るのものがあつたらうか。楽しかった、ほっとした、ゆっくり過ごせたなどほんの少しでもプラスの気持ちを持って帰ってほしい、そんな願いが筆者の中にあつた。

今回の「子育てカフェ」は市の子育て支援の専門家によるテーマトークがあらかじめ決められていた。内容は①「おむつはずしについて」②「イヤイヤ期の過ごし方」③「しつけのABC」④「子育て中のイライラ」と4つのテーマトークを設定していた。それぞれのテーマトークで約15名程度の参加者がいた。参加した親子はそれぞれのテーマトークについて、興味のあることや悩んでいることが当てはまっている親子もいたが、何となく聞いてみたい、まだ何も悩んでないが今後、テーマトークのようなことで悩むかもしれないと予測し、聞きに来た親子もいた。会場にはゆっくり座って何でも話せる雰囲気作りとして、ござを敷き好きな飲み物をそれぞれ選んでもらい輪になって座ってもらった。

ゆったりとした雰囲気の中で「おむつはずし」のテーマトークが始まった。子育て支援の専門家から「おむつはずしで悩んだり焦ったりしていませんか？」と言葉かけがあると「なかなか取れなくて」と少し笑顔で話すお母さんがいた。「うちも遅かったんです。でも取れましたよ。取れるまではすごく悩みました。周りは取れていくのになぜ我が子は取れないんだろうって。だけどおむつが外れると、あんなに悩まなくてもよかったんだなと思いました。」と話す先輩ママもいた。子育て支援の専門家は、先にお母さん方からのお話をゆっくり聞くことから始め、聞き終わると「そうですね。みんな一度は悩みますよね。そして自分の子どもだけが外れない、遅いと思いがちです。でも、子どもそれぞれに時期は違うんですよ。私自身も、同じように悩んだんです。」と笑顔で話すとお母さんからは「そうですか」という言葉と一緒に笑いが出た。子育て支援の専門家でも悩むんだという安堵の笑いだったのだろう。うまく場の雰囲気が和んだ。子育て支援の専門家、それぞれのテーマトークも同じようにお母さんからの発言を大切に聞きながら、具体的な事例や、子どもの個々の違い、月齢の差、環境からのアプローチの仕方など具体的に話していた。終始和やかな雰囲気で進んでいった。なんとなく来たというお母さんからは、「聞くだけで楽しかった」「みんないるんなことに悩んだり考えたりすることがわかった」「ゆっくりできた」との声もあった。

それぞれのテーマトークは30分から40分程度で終わったが、終わった後にもその場では聞けなかったお母さんが残って、個別に話す場面もあった。「子育て中のイライラ」ではどのお母さんも経験するようで「疲れるときがある」「ゆっくりしたいと思う」との声

があり、やはり子育て中には自分の気持ちをずっとゆったり保つことは難しいことだと感じた。また、どこかでお母さん方がしんどい、辛いなどの気持ちを受け止めたり話せたりする場は必要であるとも感じた。「イライラして、たいしたことでもないのに子どもを叱ったりする。その後で子どもの寝顔を見て落ち込んだりするときがある」と話してくれるお母さんに、周りのお母さんが「うんうん」、と頷くシーンではみんな同じ思いを持っているのだと、共感しあうところも印象的であった。兄弟げんかについてはテーマにはなかったがお母さんからの質問で他のお母さんも「うちも兄弟げんかがすごくて」と話す場面があり子どもの時期によって悩みはさまざまである事に再度気付くことができた。子育て支援の専門家が「うちもすごかったんです」と共感する話があり、「兄弟げんかは割りと長く続きます。うちの場合は高校生くらいまで続きました。でも、その経験があって我慢すること、悔しいってこんなことなんだと学ぶいい機会だと思います。喧嘩の内容は大きくなるにつれて変わってきます。」と話すとお母さんからは「まだまだ続くんだ」という声があり笑い声があがった。

永瀬(2016)はよりよく聴くための支援者の基本姿勢について「相手が自分の力に気付きご自身の力で行動を変える過程に寄り添えることです。現状の肯定からスタートすることで相手は『今ありのままのあなたがOKな存在』というメッセージを受け取ります。承認される事で、相手は『変えてみよう』という意欲や『変えることができる』という自信のタネを手に入れます。アドバイスはその後なら受け入れられる可能性が高くなります。」と述べている。今回の子育て支援の専門家は、見事にお母さん方を受け入れ上手にアドバイスしていた。お母さんを肯定的に捉えることがまず支援の第一歩となると考えられる。

学生たちの関わりは一緒に親子の中に入り、話を一緒に聞くといった参加の仕方であった。子どもがむずかるようなら、話しかけたり遊んだりして子どもとも関わりを持つようにしていた。学生たちは実習に行っただけで母親から離れた子どもを見ることはあっても、未就園児とその親との関わりを持つことはあまりない。今回は親子の関わりと、お母さんが子育てする中でどんなことに悩み、どんなことがしんどいのかを目の前で聞くことにより、今まで知らなかった子育ての実際の様子について学べていた様子であった。中には高校生が参加していて一緒に話を聞いていた。早い段階から子育てや子どもを知る良いきっかけになったのでは

ないだろうか。

3. 子育て支援を行うことによる学生の学び

大学が行う子育て支援には、地域の保護者を支援する機能のみならず、学生が子育て支援活動に参加することで実践的な学びの機会を得る教育の機能がある。岡澤・清水（2016）は、「つどいの広場」にボランティアで参加した学生の学びについて分析し、子育て支援実践への参加を通して、学生のなかに「子どもを個として観察しようとする学び」が得られると報告している。また、立浪（2013）は、2006年から2012年のあいだに継続的に取り組んできた学生主体の子育て支援実践である「もちっこ広場」の取り組みをまとめ、そのなかで学生が「子どもの姿から保育のねらいや内容について考えること」「教材研究の重要性への気づき」といった、様々な学びを得ることを報告している。立浪は、7年間の継続的な取り組みを振り返り、「日常的に子どもと接していれば、知らず知らずのうちに、子どもたちの興味や関心、心情やふだんの生活の様子が分かります。頭の中でイメージする子ども像は、自分の経験をくぐらせたものばかりではないので、どうしても抽象的になったり、なかにはまったく的はずれのものがあったりします。しかし、経験とそれを裏付ける知識や情報をつなぎ合わせて考えれば、子どものイメージはより実体に近いものになるでしょう。」と述べている。立浪の研究は、学生が実習以外の様々な場で子どもに接する必要性について論じるとともに、そのような機会が現在の保育者養成のなかで十分に用意できていないという課題についても指摘している。学生が子育て支援の場に臨むことは、比較的少人数の子どもを相手にして関わる実践の経験を得、ひとりひとりの子どもを見る視点や、子どもにあった支援を具体的に考えていくための学びを得るために有効であると考えられる。

一方、池田（2006）は、学生が地域での子育て支援にかかわることで、地域のなかで多様な個性を持った人や異年齢の人とかかわる機会が生じ、自分自身が地域に貢献していることの自覚が得られると述べている。保育者を目指す学生が保護者との関わりが少ないままに保育士となっていくことの問題点が指摘されているが（竹之下・馬見塚 2016）、学生のうちから子育て支援実践に取り組み、地域の様々なこれらの人と関わりあう経験を得ることによって、自分自身が地域のなかで貢献できるという自信を深めることは、保育者としての専門性を高めていく上でも必要であろう。

これらの先行研究において示されているように、学生のうちから子育て支援実践に取り組んでいくことで得られる学びは多い。特に本研究で取り上げる「子育てカフェ」では、地域で実際に子育て支援の中核的な役割を担っている子育て支援の専門家と協働することによって、支援の現場を肌で感じ、より実践的な学びを得ることができるのではないかと考えられる。子育て支援の専門家との協働による「子育てカフェ」は、これまで限られた回数しか実施されていないことから、学生がどのような学びを得ているのかを実証的に明らかにするには十分なデータが揃っていない。本研究では、これまでの「子育てカフェ」に参加した学生へのアンケート調査の結果から、学生が「子育てカフェ」に参加することで得られる学びについて、仮説的に検討することとする。

対象となるのは、平成28年7月10日、平成28年12月7日に実施した「子育てカフェ」におけるアンケート調査である。7月10日の「子育てカフェ」では児童学科の2回生15名、12月7日は児童学科の4回生6名が参加し、アンケートに回答した。なお、10月1日実施の子育てカフェについては、東大阪市の専門家との協働ではなく、学生と教員のみで実施したため、今回の考察の対象からは外している。以下では、自由記述（「子育てカフェ」に参加して「感じたこと」「気づいたこと」「学んだこと」）の回答結果から、「子育てカフェ」における学生の学びについて考察していく。

(1) 大学では得られない現場のリアリティ

まず1点目として、学生の自由記述のなかに、大学での学びと異なる学びが得られたという言及が見られることが注目される。

「食べこぼしで困っている家庭やトイレトレーニングがうまくいかない家庭であったりと、それぞれの家の本音を聞かせてもらいました。私たちが普段大学で学んできたことに載っていないようなことばかりで一つ一つ貴重な話ばかりでした。それぞれの発達に応じた対応が大切だと改めて思いました」

近年、大学での学びと就職後の現場での仕事との乖離から生じる「リアリティ・ショック」の問題が指摘されているが（谷川 2010）、このことは保育者の仕事全般のなかでも、子育て支援に関する領域で特に当てはまるように思われる。子育て支援の領域においては、学生は実践の経験がないまま保育者として就職し、現

場でいきなりそれを求められるという現状にあり、保育者養成課程の改善が求められている（立浪 2013）。本アンケート結果に見られる「私たちが普段大学で学んできたことに載っていないようなこと」という記述は、まさに学生が子育て支援の現場で肌で感じたリアリティであり、近い将来、実際に保育者として就職した際に、専門家として対応していかなければいけない保護者の悩みなのである。このような保護者の悩みや本音を聴き出し、それに答えていく子育て支援員の実践を間近で観察することによって、教科書から得る知識とは異なる、リアリティを伴った学びがもたらされているのではないだろうか。

(2) 子育てに伴う負の側面についての理解

次に、学生のアンケートの回答のなかに、子ども観・子育て観の変容につながるような記述がみられることにも注目したい。

「私は学生だから小さい子の楽しい面しか知らなかったの
で、子供ができてイライラすることもあるということが
わかりました。私の小さい時もイライラすることがあ
って、とてもお母さんは苦労していただとか、悩みとか、
とてもたくさんのかんことを抱えていたことがわかりました。
お話を聞いてとてもよかったです。」

「イヤイヤ期に入って自分でなんでもやりたいと思ってい
てもうまくいなくて母親はイライラしてしまうとい
ったお話を聞かせてもらいました。その中で最も大切だ
と思っただのは、共感してあげることです。何をしてもダメ
と決めつけてしまうのではなく、「そうだね」と一言子
どもの気持ちに寄り添うことも大切であるとわかりました。」

「自分が想像してた子育てと全然違って勉強になりました。
悩みがやはり多いのだなと感じた。」

保育者を目指す学生のなかには、実際に子どもと触れ合う経験をもっていない学生の割合は多い。瀬々倉 (2015) の研究によれば、2003 年時点と 2015 年時点を比較して、女子大学生の育児経験と子どもとの接触経験が減少していることが指摘されている。石川 (2015) が述べるように、子どもと接した経験が少ない学生の子ども観は、通俗的・感覚的で素朴なものにとどまっていることが多いと言われている。イメージのみが先行し、純粹無垢なものとして理想化された子ども観をもって保育者になった場合、「純粹」「かわいい」といった言葉だけでは捉えることのできないアン

ビバレントな存在としての子どもに出会うことへのとまどいや、そのことによって保育がうまくいかず、保育者としての無力感を感じるようになる可能性も指摘されている。そのような一面的な子ども観は実習の経験を通して次第に変容し、深められていくとされているが、実習のみならず、子育て支援の場でそれらを経験するのは有意義なことなのではないだろうか。実際の保護者の子育ての悩みや相談に触れる「子育てカフェ」の経験は、決して一面的なものにとどまらない子育ての実際に触れるうえで、貴重な経験となっていたことが考えられる。

(3) 具体的な行為のレベルでの子どもへの対応の理解

最後に、「子育てカフェ」で、子育て支援の専門家と協働する経験が、具体的な行為のレベルでの学習につながっている可能性を指摘しておきたい。学生の自由記述のなかには、以下のように子どもに対する関わりについてかなり詳細に記述しているものが見られた。

子どもの意思を尊重し、子どもがやりたいことに対して時には選択肢を与えたり、子どもが泣いているときには共感してあげることが大切だと思いました。そのほか、トイレトレーニングについて、トイレに関しては体内の状況によるので、練習するのではなく、タイミングの問題であると知りました。また、感情は目に見えないので、「気持ちいい」や「気持ち悪い」等は代弁してあげる必要があると思いました。

大人にとってあたりまえの時間の感覚など、子どもの目線に立って伝える、声に出していいことも悪いことも言ってあげるなど、一つ一つしっかり教えてあげることが大切なのだと思います。また、ケンカなどでどっちが悪いとしないで解決させる、決めつけるのではなくきちんと聞いてあげる、どうしてそうなのか、どうしたらいいのかちゃんと伝えてあげることなど、私は保育士を目指しているのでとても参考になりました。

子どもとの関わり方について具体的な行為のレベルで学ぶことは、保育者養成課程のなかで意外に少ないのではないだろうか。また、仮に何かの授業で具体的な子どもへの対応の仕方が扱われたとしても、それが十分なリアリティをもって学ばれていることは少ないのではないだろうか。

「子育てカフェ」では、子育て支援の専門家が保護者の具体的な悩みに答えるかたちでテーマトークを行っているため、ひとつひとつのアドバイスが具体性

を帯びている。そのため、学生の自由記述についても具体性が高まり、ケンカの場合、トイレトレーニングの場合、感情を代弁する場合といったように、具体的な行為のレベルでの学びが多く記されることになったのではないだろうか。「子どもの目線に立って考える」「子どもの意思を尊重する」といった言葉は、講義系科目のなかでも学生が耳にすることが多い言葉であろう。しかし、それらの言葉が内実をもって実感されるのは、具体的な子どもとの対応の場面であり、どのような場面で、どのような行為をすることが、「子どもの目線に立つこと」あるいは「子どもの意思を尊重すること」になるのかを実感してはじめて、これらの概念の重要性が学習されたことになる。具体的な行為のレベルでの記述とともにこれらの言葉が記されていることも、学生がリアリティある学びを得ていたことを示していると言えるだろう。

以上のように、「子育てカフェ」では、実際に子育て中の保護者の話を聴くことによって、大学の授業で得る知識とは異なるリアリティを伴った学びが生じていることがうかがえた。子育て支援の実践は、保護者にとってのメリットになるだけでなく、保育者を目指す学生にとっての貴重な学びの機会でもある。特にすでに実践経験を蓄積した子育て支援の専門家と協働することによって、実際の支援を間近に見て学ぶことの効果は大きいと言える。授業と子育て支援を連動させ、「地域との協働」「学生の学び」「保護者への支援」をそれぞれ発展させる形態を模索していくことが重要であると言えるだろう。

4. おわりに

「子育てカフェ」は未就園児親子にとってホッとできる場であり悩みを聴いてもらえる場である（山本・中山・村井 2016）。これからの子育てに頑張ろうと思ったり、焦らずゆっくり育てようと思ったり子どもともにお母さんが成長していける手がかりになる場であり続けることが重要である。そのためには子育てについて悩んでいる親子に対して押しつけや決めつけではなく一緒に悩んだり考えたりできる暖かい雰囲気大切にしていける必要があると考える。また、それぞれの親子が会おう場になっていけば、なおよいであろう。一緒に育てよう、一緒に悩んでみようといった一人ではないという気持ちを持てる場にしていく必要もある。新澤（2014）は、親子が過ごす場の人的環境について「親子が訪れる場で大切なことは人が人を迎えるということです。いくらきれいな環境であってもその場所

の雰囲気を作っているのは人間です。はじめて訪れる親子にとっては、何もかもがわからないことだらけであり、不安が多くあるのです。ちいさな繋がりでもよいですから訪れた親子と少しずつ信頼関係を積み上げていくことが大切です。」と述べている。どこまでも人と人の関わりが大きな、そして大切な事柄であるといえるだろう。

地域の中にある大学だからといってできることはそれほど大きなことではないかもしれない。しかし、大学ならではの資源を生かして、新たな子育て支援のシステムやネットワークを探求していくことが必要である。今回の研究では、十分にそのような面を明らかにすることができなかったものの、協働した子育て支援の専門家からは、普段とは異なる利用者層との接点となるという声や、行政が行う子育て支援の情報提供を広く行っていくための機会となるという声も聞かれた。継続してこのような取り組みを行っていくなかで少しずつ地域に合った支援の形が定着していくことになるのではないかと。ただ、今後も学生、地域で暮らす未就園児の親子、子育て支援の専門家などが一緒になって子どもを育てていくという方向は同じである必要がある。学生をただ学ばせるだけであったり、子育て支援の専門家の指導だけであってはならないだろう。

学生は今後、保育者にもなるが母にもなるであろう。今、学生たちが多くの保護者や子ども達と接することは次の世代の子育てを支援することにも繋がっていく。現代では、実際に子どもを見たことがない、関わったことがないという学生も多い。実習とはまた違う面で自分が小さいころはどうだっただろう、自分が母親になるってどんなことだろうと目の前の親子を見て感じ考えることが未来の母になる学生のための子育て支援ともいえるであろう。

新澤（2014）は親子の居場所について「第一に親も子もリラックスできることが大切です。これは物的な環境も大切ですが、まずは周囲がその親子へ向けるまなざしがどういうものかによって大きく左右されます。第二にはありのままの姿を受け入れることが必要です。初めから完璧にできる人はおらず肩の力を抜いて一つずつ学びながら一緒に子育てをしましょうというメッセージを発信していくことが大切です。第三に役割を持つことです。たんにお客さんとしてだけでなく参加者としても気持ちを持ってもらうことも大切です」と述べている。何もかも用意されたところに来るだけでなく母親自身が参加しているという意識をもってもらうことにより次の参加に繋がることになるであろう。

今後、地域の人々、学生、地域で暮らす親子、市の子育て支援の専門家、みんなで子育てをしていく場として大学があると思えるような子育て支援を目指したい。そのため人間関係の築きを、時間をかけて行っていく必要があるだろう。

今後、「子育てカフェ」に絵本を多く取り入れる取り組みも行う予定である。多くの絵本がある大学ならではの試みである。親子が一緒に好きな絵本を読む、学生に絵本を読んでもらう、あるいは学生に絵本を読んでもらっている傍らで母親がお茶を飲みホッと一息つく。少し仲良くなったお友達のママに絵本を読んでもらう。絵本が好きなお母さんが何人かの子ども達に絵本を読んであげる。好きなお友達同士と一緒に絵本を見る。そんな人間関係の豊かな触れ合いが大学ではできると考える。絵本の大切さは言うまでもないが絵本を環境の一つと捉えみんなで育てあう、みんなで育ちあう子育て支援を目指していく。その中から導かれてくる問題があればその都度またみんなで解決していく。形は変化していても、子ども達をみんなで育てるという暖かさを忘れずに子育て支援に取り組んでいこうと考える。

付記

本研究は、第1章と第3章を山本が、第2章を中山が執筆し、第4章については共同で執筆した。

謝辞

本研究は、平成28年度大阪樟蔭女子大学特別研究助(くすのき研究助成)を受けてなされたものです。貴重な研究の機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。

文献

- 石川正子 2015 「保育学生がもつ子ども観」『盛岡大学短期大学部紀要』第25巻 1-7頁
- 岡澤哲子・清水益治 2016 「子育て支援事業へのボランティア参加学生の学びについて」『帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要』第1巻 49-54頁
- 小原敏郎・中西利恵・直島正樹・石沢順子・三浦主博 2016 「保育者養成校がキャンパス内で行っている子育て支援活動に関する調査研究」『共立女子大学家政学部紀要』第62巻 153-163頁
- 瀬々倉玉奈 2015 「子育て・子育て支援としての大学講義—赤ちゃんとの関わり体験調査—」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第5巻 117-125頁
- 竹之下典祥・馬見塚珠生 2016 「学生の地域子育て支援ひろば実習から得られた保育士養成の課題」『盛岡大学紀要』第33巻 43-52頁
- 立浪澄子 2013 『実践力を育てる—学生主体の子育て支援を通して』ななみ書房
- 谷川夏実 2010 「幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容」『保育学研究』第48巻第2号 96-106頁
- 永瀬春美 2016 『気持ちにこたえる子育て支援—実践力を磨く基礎知識&事例集』赤ちゃん和妈妈社
- 新澤拓治 2014 「第11章子育て支援の場における人と環境」大豆生田啓友・大田光洋・森上史郎編『よくわかる子育て支援・家庭支援論』ミネルヴァ書房 172-173頁
- 山本一成・中山美佐・村井尚子 2016 「大学と行政のコラボレーションによる『子育てカフェ』の実施と検証：地域に根差した子育て支援を目指して」『大阪樟蔭女子大学紀要』第6巻 211-219頁